

国文学と白氏文集

艸 野 忠 次

一 平安朝時代の文学と白氏文集

白氏文集が、もっとも多く国文学に影響を及したのは、平安朝時代である。

文は文集、文選、はかせの申文。——枕草紙

ひとり燈火のもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とすることこそよ
う慰むわざなれ。文は文選のあはれるまきまき、白氏文集、

老子のことは、南華の篇、この国の博士どもの書けるものも、古
のは、あはれること多かり。——つれづれ草

つれづれ草には、老子と荘子に加わり、文選を第一にあげているの
に対し、枕草紙では、白氏文集が第一にあり、かつ「白氏」の二字
を略していることなど、作者その人の好みにもよるがおしなべては、
時代の風潮を現わしているように思われる。

白氏文集が、平安朝の文学に、もっとも多く影響したわけは、いろ
いろあるが、とりわけ其のおもな所以を考えると、その第一は新しい
時代の文学であつたこと、その第二は、其の内容を、平安朝の人が受
けいれ易かつたことであろう。

二 白氏文集と作者の白楽天の時代

白楽天の時代は、唐の王朝のころで、文学ことに、詩が盛んであつた。
詩の上から、唐の時代を、初唐、盛唐、中唐、晩唐の四期に分ける
が、詩のもっとも盛んであつたのは、盛唐のころで、その時代を代表
する詩人は李白と杜甫であり、このほか王維をはじめとして、多くの
作家がある。

白楽天は、中唐の作家で、韓愈と相ならんで、韓白といわれ、ある
いは、元稹と相ならんで、元白といわれる。

盛唐の詩は、平安朝前期の文人に読まれたが、白氏の集が入って
くと、むしろ、白氏の詩が喜ばれるようになった。

李白や杜甫などの盛唐の詩が日本に喜ばれるようになったのは、は
るかに後の江戸時代である。

白氏の詩が、平安朝において、盛唐のものより喜ばれたわけは、や
はり第一に、その新しい文学であつたことと、つきには、その内容が、
その時代の人に、分りよかつたからと考えられる。

三 平安朝における新しい外国文学としての白氏文集

白氏文集は、すべてで七十五巻あり、その完成したのは、唐の武宗
皇帝の会昌五年、日本では、仁明天皇の承和十二年——西紀八四五

—である。

しかし、その前の大部分の五十巻は、唐の穆宗皇帝の長慶四年、日本では、淳和天皇の天長元年——西紀八二四——に、白氏長慶集として、世に出ている。

「長慶」という名は、年号より取ったのである。

天長元年という年は、饒暎天皇の弘仁十四年の明くる年であり、日本の平安遷都は、これよりさかのぼること三十年、桓武天皇の延暦十三年、唐では徳宗皇帝の貞元十年に当っている。

そのころ、すなわち、延暦十三年には、作者の白楽天は、年二十三歳で、まだ、修学の途中にある。

弘法大師、伝教大師の入唐は、延暦二十三年のころ、白楽天は、年三十を少し越え、進士の試験に及第して、秘書省の校書郎になっている。

白氏長慶集の出た長慶四年は、楽天年五十三歳、太子左庶子の官にあつて、東都に分司し、洛陽の履道里において、もとの散騎常侍の楊氏の旧宅を手に入れて、こゝに住んでいた。

白氏文集の完成した会昌五年は、年七十四で、その卒する前年に当り、すでに会昌二年に、太子少傅をやめて退隠していた。

白氏のころは、日本から遣唐使や留学生が盛んに出かけた時代である。

かくて、白氏の集は、作者の楽天が在世中、すでに、日本に渡来し、上流貴族のあいだに流行するようになった。

日本にまで読まれるようになったことは、作者も聞き伝えて知ったほどである。

したがって、平安朝ごろの人が読む彼の土の詩文集では、白氏の集など、最も新しいものの一つであった。この最も新しいということは、たしかに、白氏の集が日本に盛行したわけの一つである。

そのころの漢文学としては、五経や史記や文選が学ばれたが、これは、今の人が、イギリス文学で、シェークスピアなどを読むのと同じく、古典の学問であつた。

ところが、白氏文集になると、これは、新しい現代の文学であつた。遣唐使、留学生、留学僧を通じて、唐の様子を窺うことを得た平安朝の知識人たちは、その時代の新文学である白氏の集に、いたく胸を打たれたのである。

四 白氏文集そのものの形式と内容

いかに新時代の文学でも、その形式と内容が、平安朝の人々に、受け入れられないようなものであつたならば、あれほどに、流行しなかつたはずである。その盛行したわけは、第二に、その形式と内容がすぐれていたことである。

どこが、すぐれていたかというに、

A、形式において

- 1、語句が、かなり平明で分りよいこと
- 2、敘述が詳細で、親しみやすいこと

B、内容において

- 1、人生のいろいろなことが、真摯に詠せられていること
- 2、白氏みづからの文学生活が、そのまま、読む人にせまること
- 3、文学として、甚だすぐれたものが有ること

などであらう。

語句が、かなり平明であり、敘述が詳細であることは、白氏の作風であって、これがために、盛唐の詩に見られる渾厚の趣が乏しいけれども、そのかわり、一般の人には、分りよく親しみやすい特長をもっている。

宋の世になって、蘇東坡が、白詩を評して『白俗』といったのは、この形式の上のことで、たしかに其の弊を否定することは、できない。「白氏は詩を作ること、老婦人に見せて、わからぬときは、わかるように改めた」という伝説も、ここから生れたものであらう。

しかし、平明ではあるが、字句は、ことごとく理解しやすいものばかりではない。また、平凡な字句のみではない。その中に、佳句に富んでいることは、和漢朗詠集に多く取られていることでも、明かである。

以上、のべたことは、おもに詩についてであるが、文章についても、ほぼ、その作風は同じである。

ただ、文章においては、唐宋の諸家との比較になり、盛唐の詩人との比較とは異なる。

白氏の文章には、唐宋の名家に追隨する作がある。しかし、白氏をして白氏たらしめるものは、その詩である。

白詩の内容を考えると、人生のいろいろのことが詠ぜられている。

これは、白氏が人生詩人たる所以であって、その抱いてる詩論を實際に表わしたものである。

白楽天の詩論は、その人生観に根をおろしている。

白氏の人生観は、仏教に負うところが大きいが、これは、その中年以降である。

中国における一般家庭のつねとして、幼年時代より儒学の数養によるところが多かった。

したがって、中年以前の時代、すなわち、くわしくいうと、元和十四年、四十四歳、江州司馬に左遷される前は、儒学における人生観に本づき、かつ、之に、古代の「詩」の学問の説を取って、その詩論を形成している。

儒学の人生観において、そのもっとも深く影響を受けたのは、孟子である。

孟子の尽心上篇に、つぎの話がある。

むかしの正義の士は、困窮すると、ひとり、

(一) その身の修養につとめて、安心立命の静かな生活をなし、

榮達して政治をするようになれば、

(二) その身の修養につとめると共に、世の中の人が幸福にくらしめる

ように、善政をしく。

窮則独善其身、達則兼善天下。

これが、青年時代の白氏を中心思想をなしている。

それから、古代の「詩」の学問には、毛詩の序に見えているもので、詩は、風教に役立つべきものである。という思想である。

かくして、風教に役立つという意味で、時代の善悪の事件を詩に詠じ、世の中の政治や風俗が善くなるように諷刺した。

これを、白氏は、諷諭詩と名づけている。これは、上述の孟子の語の中の(二)によるものである。

(一)によるものは、間適詩と名づけ、公務の余暇、独り処るとき、病を養って間居しているとき、その心情を詠じている。このほかに、離別などの感傷を詠じたものを感傷詩と名づけている。

このほか、五言七言の長句絶句で、卒然として、一時一物にひかれ、一笑一吟に発したものを雑律詩と名づけている。

その最も重んじたものは、諷諭詩であったが、その時代の中国の人に重んぜられたのは、感傷詩の中に入っている長恨歌や琵琶行などの作と、雑律詩と名づけたものであった。

この作者の心もちと、時代の好みと合わないことは、白氏自身も、みとめざるを得なかった。

かくして、白詩には、人生のことが、いろいろ、詠せられており、平安朝文人の愛誦は、必ずしも、感傷詩、雑律詩のみに止まらず、諷諭詩にも及んでいる。これは、社会のいろいろの事象に対する白氏の詠歎に、人を動かす尊い生命が、流れているからである。

白氏みづからの文学生活というものを考えると、白氏文集の中に述べているように、作詩が、その生活の大きな部分を占めている。

目に見、耳に入り、心にふれる物事は、一つ一つ、詩に詠じてゆくという熱心な作詩の生活には、永遠の力が、こもっている。

長恨歌や琵琶行のようなものは、文学として、きわめて、すぐれているものである。その物語の内容といい、これを語る字句といい、ともに、きわめて、文学の香おりが高い。

かくて、長恨歌のごときは、平安朝の宮廷に生れた源氏物語に好材料を供した。

五 日本の文人と、その白氏文集の読みかた

白氏文集は、今では、七十一巻、目録を併せて七十二巻のこっているが、もとは七十五巻あったのであり、白氏長慶集といわれた部分だけでも、五十巻ある。

この五十巻だけでも、その分量は、かなりのもので、そうたやすく、読みうるものではない。

藤原公任が和漢朗詠集を作って、白氏の詩句を百三十八条も引いているから、これによって白詩を知ったというほどの人も多かったことと思われる。

しかし、源氏や枕草紙の作者などは、みなすべてに目をとおしていると考えられる。

増鏡に

売炭の翁は、あはれなり

という今様を引いているが、この売炭翁を詠じたものは、白氏文集巻四にあり、朗詠集に取られるような性質のものでないから、この今様の作者は、白氏の集を読んでいたことが分る。

また、この今様を朗詠した人にも、白氏の売炭翁の詩を理解してはたはずであるから、増鏡や徒然草のできたころから、さかのぼり、平安朝にかけて白詩が、いかに読まれたかの一端を、うかがうことができる。

また、本朝文粹巻十二にある池亭記は、白氏文集の終ごろにある池上篇を見ての作であり、その文の中に作者の慶滋保胤は、白氏の集を愛読したことを述べている。

したがって、そのころの文人たちは、白氏の集を読んでいたと思われるのである。

しかし、白氏の集を読んだとしても、どのように読んだのであろうか。

漢文というものを、語法の上から注意して正確に読むようになったのは、江戸時代からである。

平安朝ごろの人は、まだ、それほどになっていない。

岩波文庫本の古本説話集巻上に

清少納言第十二というのがあり、この中に

いまはむかし、二月つごもり、かぜうちふき、ゆきうちちるほど、公任の宰相の中將ときこえけるとき、清少納言がもとへ、ふところ紙にかきて

すこしはるある心ちこそすれ

と有り。 「げに、けふの氣しきに、いとよくあひたるを。いかがつくべからむ」と、思ひわづらふ。

そらさえてはなまがひてちるゆきに

とめでたくかきたり。いみじくほめたまひけり。としかたの宰相、「ないしになさばや」とのたまひけるとぞとある。

これは、白氏文集巻十四に南秦雪と題する一篇の中の

三時雲冷多飛雪、

二月山寒少有春。

の句に拠ったものと考えられるが、この中の

少有春

は、江戸時代の読みかたからすれば

春あること少し

である。

少し春あり（「少しく春あり」とも、よめる）

というような読みかたは、意味の上からは、おかしいことである。こゝろいう読みかたを見ると、平安朝時代の人は、かなり、大まかに読んでいたことが分る。したがって、平安朝の文人たちは、白詩の特色である

1、語句が、かなり平明で分りよいこと

2、敘述が詳細で親しみやすいこと

と相まって、白氏の集を通読していたと考えられるのである。

改造社の「啄木研究」昭和四年三月号に、石川啄木が、本郷の蓋平館で金田一氏と同宿していたとき、金田一氏の完残りの唐詩選を持出して日夜よみふけり、その中の好きなものをノートえ丹念に筆記したといつて、浪淘沙詞の其の筆録の写真を載せているが、これは、唐詩選ではなく、白氏文集巻三十一にあるものである。

啄木が白氏文集を読んだことは、その日記に見えている。

その北海道回顧の歌は

浪陶沙長くも声をふるはせて

歌ふが如くさまよひて来ぬ

であり、かの「一握の砂」にある

浪陶沙

ながくも声をふるはせて

うたふがごとき旅なりしかな
は、この改作であろう。

啄木は旧制の中学を五年まで学んだ人であり、国文、漢文、英文は、かなり読みこなす力のあったことが、その全集によって知られるし、その日記によって、白氏文集を、かなりに読みこなしたと思われるが、大体において、通読の域に止まるものである。生活に追われながら、源氏を読み杜用を読んでいるところであるから、平安朝の文人のように、気ながく読んだわけではない。

この通読しておもしろいというのが、白氏文集の長所で、ことに、平安朝以来、日本の文人に愛読された所以であろう。

平明で、詳細で、実人生の姿が、くわしく語られているところに、解釈に、かかわらず、気楽に通読しうる特長を持っている。

六 日本の文人の読んだ白氏文集の本文の系統

日本の文人の見た白氏文集の本は、おそらくは、平安朝のころ、彼の地より伝来した本に本づくものである。

一九五五年一月、北京の文学古籍刊行社から影印された宋本の白氏文集は、現存の刻本では、最も古いものといわれているが、これと、江戸時代に行われた板本とを比べると、少しづつ、異同があり、それぞれ、長ずるところが有る。

江戸時代の板本として、ひろく行われたものに、元和四年、那波道円が校定した本があり、さらに万治元年に、立野春節が、自家に得たる菅家の古い読みかたと称するものに加えられている本に拠って校刊

した本がある。

上述の北京影印の宋本は、鉄琴銅鐺樓の旧蔵、国立北平図書館の所蔵本で、南宋の初ごろの刻本と考えられるが、江戸時代の立野本と比べると、それぞれ長ずるところがあるから、両者は、別系統の本であったと考えられる。

立野本は、その跋文に菅公の古点に拠ったということがよく、王朝よりの系統の本であり、平安時代の文人は、その伝来のままの正しい姿で、読んだことであろう。